

崇徳会研究・研修センター便り第10号「学会発表を通して得たもの」

(2026/5/25)

地域支援事業部 地域生活支援室 太刀川康知

私は、2025年10月25日26日に北海道の札幌医科大学で開催された日本精神障害者リハビリテーション学会にて、当院の3病棟（精神科救急病棟）で実施している取り組みや訪問看護のこと、療養生活継続支援加算等含め、退院支援について発表をしました。（共同研究者：こころのリハセンター主任 橋爪卓さん、第3病棟 木村皇平さん）。発表準備の過程では、抄録の作成からスライドの構成、質疑応答への準備まで、多くの課題がありましたが、その中で得た経験は非常に貴重なものでした。

「学会発表準備で得た気づき」

私は日々の業務について年1回は学会発表をすることを目標としています。今回、発表準備を通して、研究は個人の作業ではなく、テーマ設定の段階からチームで検討し先行研究を探るところから始まります。そうしたことを踏まえてチームで話し合い、計画的に進めることの重要性を再認識しました。また、研究として整理する過程で、日頃行っている支援を客観的に見直すことができました。普段の実践では気づきにくい支援の偏りや課題についても振り返る機会となり、根拠を持って支援を考える重要性を再認識しました。

「発表後の意見交換から得た学び」

学会当日は、発表後の質疑応答で参加者の皆さまから多くの示唆をいただきました。特に質問にあったことは、「当院へ入院すると多くの方が退院後に仕事に就けるんですね。」や「地域支援者とどのように連携を取っているか。」等、様々なご意見をいただきました。また、他の医療機関の取り組みを知ることで、当院では当たり前になっていた支援方法を改めて見直す機会となりました。他医療機関ごとに地域資源や支援体制が異なる中でも、多職種で連携しながら一人の人をアセスメントし地域支援者へどのように伝えるか、その後の地域生活をどう支えるか等、重要性を学ぶことができました。これからも続けていけたらと思います。

「まとめ」

これを機に、研究活動や学会発表に挑戦してみようと思われた方がいれば幸いです。

